

1. はじめに

1.1 目的

一般に古民家については、熱環境的性能が良くないとか、生活空間が今日的に対応しにくいとか、老朽化が著しいなどの理由で、伝統技術や学術的意味などに価値あるものは残されるが、そうでないものには取り壊しが待っている。

しかしながら、価値あるものでも経済的な理由により必ずしも残ることはあたわない状況もある。このため、NPOやボランティア団体を中心に、古さへのこだわりや愛着・思い入れといった心情的な側面からも、保存について精力的な活動が展開されることも多い。

古民家をめぐる保存問題について、著者は、物理的性能の検討として多くの研究があるものの、心情的といった直感的な検討としての研究があまりないことにいささか疑問を持っている。特に、居住に関して便利さや快適さを念頭に置くのはいいとしても、居住によるメンタルな反応にはスポットがほとんど当たっていないので、ここにこうした観点で古民家およびその周辺自然環境について論及することにした。すなわち、ヒューマンサイドから今一度こうした問題について論議し、人間の育ちという面から建築空間が何をしてきたのか、また育ちが本来どうあるべきか、さらに古民家の魅力が一般の方々はどう認識されているのか、といったことを包括的に議論することにした。

対象とした民家は富山県大岩地区の山里にある築127年のものである。これは、2012年に大ヒットした細田守監督のアニメ「おおかみこどもの雨と雪」の舞台となった山村の民家である。

1.2 問題の所在と視点

古民家を愛好するかが一般人の中には意外と多い。一般人にとって古民家のどこが良いのか、好きなのか、ということに始まって、古民家の魅力とは何であろうか、考えたい。

民家はどこにでもあろうが、ここでは特定のものに限定したい。それは、アニメで話題になった古民家である。なぜアニメのものにこだわるかについての理由は、古民家がアニメで紹介されたおかげで全国から古民家ファンやアニメ映画ファンが当該古民家に訪れて、古民家を堪能している様子を長期にわたり観察し、面白い知見を得たからである。

2. 古民家における居住の様相

古民家の良さを市民の観点から分析するために、今(現代)を起点として時間をさかのぼって生活面から論じてみよう。

なお、古民家のもつ、その地域の気候風土に合った住まい方の知恵や文化性がある。これは次回に回し、ここでは扱わない。

2.1 囲い

(1) 建物内の囲い、子どもの行動； 建築の囲いによる空間構成そのものが人間の行動に制約を加えているのではなからうか。

古民家には、そのようなバリエーションは一つもなく、しかも空間は隙間だらけそのものである。子どもの成長に障害となることはなにも無い。アニメでも子供が家の中を走り回って伸び伸びしていたことが印象的である。

(2) 建物内の囲い、部屋割り； アニメでは木造校舎もでてく

るので、学校について若干触れておく。学校では一見広い空間としてのクラスという囲いがあり、逆に住宅では細かな部屋割りという壁による囲いがある。最近、子供には自閉症が多発している。囲いと関連させる研究者も多い。

(3) 建物内の囲い、大人の行動； 古民家の囲みのない様相とは、住人がどうやって生活を営もうかと、考えながら多様性をむしろ楽しむことそのものである。それを可能にするものが古民家なのであるといっても過言ではない。

(4) 建物外の囲い； 通常住宅回りや団地回りなど、建物外周に塀がある。これに見慣れている人にとっても、そのような障害のまったくない山村という自然が自然と受け入れられる。しかも、人は山村に居るだけで、現代特有のイライラがいつしか落ち着きが変わっていく。当地への来訪者は数時間にもわたりただずんでおられる。

(5) 外界と融合する空間； 古民家では、囲いが開放的なことに加え自然の中に立地しているので、自然のどこかきや生命のいきづかいが室内にまで及んでいる。これが人に対しては心をのどかにかつ温和にし、古民家そのものに対し自然の匂いとなるのであろう。

2.2 技術のかかわり

(1) 設備技術； 最近、生活が便利になるのはいいが、洗面所では手を出せば水が出て、廊下を歩けばスイッチを入れなくても電灯のオンオフができてしまう。人間は少しずつ何も考えなくなってきた。

また、照明器具についても、エコ技術の前に使う側の器具使用の姿勢が問わなくなってきた。ある研究者は白熱電灯の家とLED電灯の家とでエネルギー消費を調べた結果、白熱の家の方が断然に消費電力が少ないことを結論した。理由は、前者の家では住人自ら考えてこまめに電灯(のスイッチ)を入り切りするからである。

(2) 古民家では； 古民家における白熱電球云々は別にして、古民家ではのどかな自然のものでエネルギー浪費は似合わず、節約の心がけが自然とできている。

(3) 技術の使いこなし； 上記(1)(2)の話については最新技術の否定と受け止める方がおられるが、そうではなく、最新技術の使いこなしが大事であると主張しているのである。

2.3 感覚

(1) 音環境； 現代建築は遮音に気を配っている。自分の都合以外の音は騒音としているので、公園で遊ぶ子どもの声も騒音なのである。研究によれば、音なしの世界では人は余計に落ち着かなくなるという。

古民家では、もともとの立地が山里であることもあるが(平地であっても)、外からの音や気配も中への侵入は歓迎なのである。少なくとも、遮音のないことがかえって落ち着ける空間が醸し出されている。

(2) 感触と視線； 木造校舎にしてもしかり。なぜ木造なのか。空間の構成が硬い無機質な囲みによるものではないからであろう。確かに、隙間の多い木造の開放空間では、壁であっても閉じられた空間ではなく、しかも、壁そのものが木であるゆえに

木のぬくもりという暖かさで寄り添っているという印象が醸し出されている。これが人にやさしいということである。

24 営み

(1) コミュニケーション； 現代建築は(家の中と外をしっかりと分離している)ので、ご近所さんとのコミュニケーションには努力して実現させるものといった感がある。これに対して古民家には縁側があり、(家の中と外が連続していて、どこまでも見通せる。この見通しは、家のみならず外でも集落でも一緒である。家の中の生活の匂いが外にまで流れている。そんな雰囲気のもので、コミュニケーションはごく自然に図られている。

(2) 何でもそろっていると考えなくなる；

何もない広場で子どもが集まると、どうやって遊ぶかを皆で考えそして遊ぶ。何もないとは押し付けけないということである。しかしながら、都会では野外遊具を置いて決められた遊び方を押し付け、子どもの思考能力がむしばまれつつある。家の中でも一緒のことがいえる。子どもにとって遊びは、本来学びでもあり、学びとしての勉強なのである。

(3) 遠慮のいらぬ空間； ヒステリックな雰囲気が漂いぎみの都会では生活には遠慮が必要であり、囲いが必要とされている。一方の山里の古民家では、囲いのないことがおおらかなコミュニケーションを図り、例えば子どもが大きな声で語り合い走りまわると、住人の行動が束縛されず実に自然である。

3. 古民家の捉え方、市民と専門家

3.1 建築専門家からの解釈

(2) 現代建築がなぜ反面教師か； (若干抽象論となるが) 個々の技術は個々の対象に限定されている。種々の対象が絡む場合に不都合が起これば個々に対症療法するだけの事であり、何の解決にも届かないこともままある。よって、今の技術がバランスを欠きながら複合化・肥大化していることを認識して、複合以前の段階まで時間を巻き戻したところからの検討が必要といえる。古民家はこうして現代に問題を突き付けているともいえるすぐれものなのである。

3.2 市民と専門家の違い

専門家は、現代への活用のために古民家から学ぶとして古民家を捉えている。一方の市民は如何に。今回のアニメを鑑賞された方々は古民家ファンというよりも古民家舞台のドラマファンである。このため、彼らはドラマ世界の堪能として、舞台としての古民家の良さを堪能しているのであり、その根底には、現代の生活の対極として感覚的な(つくりあげた)世界がある。すなわち、市民には古民家を含めた感覚世界が広がっており、これは当然のことながら専門家の世界とはまるで違う。

4. 古民家によせる市民の思い

アニメのあらすじを簡単に紹介する。母と子ども 2 人が住みにくくなった都会を離れ、田舎の山里にきて農業をいとなみながら、自然の中で子どもが母の愛のもとたくましくすくすくと育っていく、というのがストーリーである。

このアニメを観て、なぜ人が感動したのであろうか。当該地を訪れた方々に聞くと、女性の方々は「母と子のきずなや子育て」に感動といわれ、男性の方々は「なかなかうまくいえない」けれども感動したとのことであった。また、古民家につい

てはどうですかと聞いたところ、「匂い、澄んだ空気、落ち着く」といった感覚的なことは当然の事、「古民家とその中に住む方々に魅せられ感動した」というようなことをいわれる方もおられた。まさに、感動の核心は人間ドラマだったのでしょう。だから、彼らはアニメの舞台に(複数回)来て、舞台を「見る」のではなく舞台(で演じられるドラマを)「堪能する」のである。

これより、古民家とその周辺には、情景の物語化、あるいは物語の情景化がみてとるといえる。

5. 古民家の保存と活用

人間模様の空間としての(風景を含む)古民家をどのように今後展開していくか、いくべきかを考えたい。

(1) なぜ保存か； これについては、古民家と原風景を堪能したいから風景を構成する古民家は絶対あってほしい。それに上記論評のように古民家が現代へ警鐘を鳴らし続けて欲しい古い建物の生命を奪う現代の理不尽さに抗議もしたいからである。

(2) 活用の際して； 動態保存の活用としては、(各地で見られる)観光目的の商業施設の方向ではなく、古民家の現代へのメッセージが生き生きと続く方向が目指されている。しかも、そこにただずむという日常が自然と受け入れられ、(自販機一つも不要とし)現代を忘れるかのように原風景・古民家の舞台での人間ドラマが堪能できるようになっている。これが活用の実際であり、情景が息づいていることが何よりも魅力である。

(3) 訪問者も含めた参加型の活用； 当該地では、来訪の方々や地元の方々が互いに語りの輪をつくり、あたかも大家族のように共に空間を満喫し共に時を過ごしておられる。そして皆さんが家主となり(遠隔地)地元民となって、その思いが古民家再生にも自然と大きな力にかわり、全国ネットワークの充実や賦役活動への積極的参加に加えて、なによりも今後の種々問題に対する問題解決能力が醸成されている。こうした点が他に類を見ないユニークなものであり、コミュニケーションのヒューマンネットワークそのものが保存活用なのである。

6. おわりに

原風景や古民家を鑑賞し堪能するという行為を通して検討した結果は次の通りである。

(1) 古民家の開放的な囲みと単純な空間構成が住まいの多様性と生活考を可能にし、自然と集落とのかかわりをも密にする。また生業の拠点としての躍動感も手伝って、自然のなかで健康的な育があり、愛情や感性など人間性が醸成されていくといえる。現代建築の中での生活では、得てしてそうしたことを忘れがちである。

(2) 今の建築はバランスを欠きながら種々の技術を複合化した産物であるから、そのことによる弊害が随所にみられるようになってきた。そこで抜本的な対処として、現代の技術複合以前の状態にまでさかのぼっての検討が必要と考える。これが古民家を含めた木造建築の現代へのメッセージであり、これを可能にしたのは現代を反面教師として蘇った古民家を含む木造建築である。もちろん、そこには人間の愛があり育ちがある。今後に向けて大いに考えていきたいものである。

おおかみこどもの HP <http://ookamikodomonohananoie.jp/>